

インドネシア語の談話標識 *ya* によって開始される WH 質問への返答

藤崎拓海 (大阪大学大学院生)

1. はじめに

質問発話は、相手に応答 (answer) を産出するよう強く働きかけ、またその質問に適合する形の応答が産出されることをも要請する。しかしながら、質問を向けられた話者 (以下「応答者」) は、質問が求めるような形の応答を産出できない/したくない、という状況に置かれることもある。そのような場合に、応答者が様々な形で質問に抵抗を示すことが、会話分析の分野において多数指摘されている (Raymond, 2003; Stivers & Hayashi, 2010; Fox & Thompson, 2010; Stivers, 2011; Heritage & Raymond, 2012 など)。特に、先行質問に抵抗を示すような返答 (response)¹ を産出する際、しばしばその前置きとして特定の言語標識がターン (発言順番) 冒頭で用いられることが、すでに様々な言語に関して報告されている (Heritage, 1998; Schegloff & Lerner, 2009; Kim, 2013; 串田・林, 2015 など)。例えば英語会話では、WH 質問に対する返答の冒頭に置かれた“well” が、後続する返答が端的でないという「注意喚起 (alert)」として働く (Schegloff & Lerner, 2009)。また日本語会話では「いや」が、WH 質問の想定や前提などに「不適切性」が感知されたことへ注意を喚起する (串田・林, 2015)。

本発表では、インドネシア語会話において WH 質問への返答が談話標識 *ya* によって開始された場合、先行質問に同調しない返答が後続することを例証する。そうすることによって、返答の冒頭で *ya* を用いる手続きが、先行質問に抵抗を示すために用いられていることを明らかにする。

2. *ya* に関する先行研究

インドネシア語の口語的な会話において、*ya* は肯定詞としての働きを持ち、談話標識としてもしばしば用いられる。これまでに談話標識 *ya* を取り扱った研究では、発話の末に現れる *ya* に関して、クエスチョン・タグとしての用法やその派生的な機能を中心に論じたものが目立つ (Sneddon, 2006; Hamdani & Barnes, 2018 など)。一方 Wouk (2001) は、さまざまな位置における *ya* の機能を指摘している。Wouk によれば、*ya* は、ターンあるいはイントネーション・ユニットの冒頭において、帰結やまとめを導く機能を持つという。しかしこの指摘は、本発表で扱う *ya* の事例にはあてはまらない。

本発表では、WH 質問への返答の冒頭において用いられる *ya* に限定し、*ya* がどのような WH 質問への返答の冒頭で用いられ、それに続いてどんな返答が産出されているかを会話分析の手法を用いて分析する。

3. データ

本発表の分析は、インドネシア語を第一言語とする話者 2 人ペアによって対面で行われた自然会話 (合計 16 ケース) を録音・録画したデータに基づいている。これらは、2017 年から 2019 年にかけて発表者が大阪及びジャカルタで収集したものである。話者同士の間柄は友人同士が中心であるが、同じ専攻の先輩と後輩、大学教員と学生、上司と部下による会話もそれぞれ 1 ケースずつ含まれる。分析に際してはこれらを詳細に文字化し、トランスクリプトを作成した。

4. *ya* によって開始される WH 質問への返答

今回集めた事例を観察する限り、*ya* は次の 3 種類の環境で用いられている。それは、1) 核心部分を先送りにする応答の冒頭、2) 知識状態に関する主張・想定に抵抗を示す応答あるいは返答の冒頭、3) 質問の前提を承認しない返答の冒頭である。以下、それぞれについて事例を挙げながら見ていく。なお、各事例において→は WH 質問、⇒は返答を示す。

¹ 以下では、「応答 (answer)」と「返答 (response)」とを区別して呼ぶ。「応答」は、先行質問の要請に応じ、求められた情報を提示する行為を指すが、「返答」は「応答」に限らず先行質問への反応として産出されている行為を包括的に指す。例えば、「なんで?」という質問に対して「わからない」と発話することは、質問に反応してはいるが期待される情報を提示していないため応答ではなく返答である。

4.1 核心部分を先送りにする応答

4.1 で取り上げるのは、WH 質問が引き出そうとしている答えが *ya* の産出後すぐに提示されない事例である。質問を向けられた際、応答者は時に、求められている情報を提示するにあたってまず状況説明や背景情報を述べておく必要性や、関連する出来事について語る機会を見出し、要請された情報の提示を先送りに行うことがある。*ya* は、そのような応答の冒頭でしばしば用いられる。

事例1 [RHKT 12:21]

- 01K: Pas wawancara gimana. Ditanyain.
時 面接 どのような 聞かれる
面接のときどうだった? (日本語能力について) 聞かれた?
- 02R: Iya ditanyain.
肯定詞 聞かれる
うん、聞かれた。
- 03K: → Terus lo ngapain.
それから 2SG 何をする
それであなたは何をしたの?
- 04 (1.4)
- 05R: ⇒ **Ya** ditanyain, "bisa bahasa Jepang nggak," gitu.
PRT 聞かれる できる 言語 日本 否定詞 引用標識
Ya 「日本語できる?」って聞かれて、
- 06 ⇒ "Iya bisa:."
肯定詞 できる
「はいできます」(と答えると)
- 07 ⇒ E::h, "kira-kira se:::-, sebisa-nya sebisa apa"
おおよそ ~ほどできる-the ~ほどできる 何
えっと、「だいたいどのくらいできる?」(と聞かれた)
- 08K: =He'eh
うん。
- 09R: ⇒ Ya::: gua bilang aja gini.
PRT 1SG 言う だけ このよう
だから、俺はこう言ったんだ。
- 10 ⇒ "Ya ini sertifikat saya."
PRT これ 証明書 1SG-FORMAL
「Ya これが私の証明書です」(と)

この事例のように、どのような形式の応答を提示すべきかに関する制約に抵抗し、質問が引き出そうとしている以上の情報を応答者が提示しようとするとき、*ya* がその前置きとして用いられる。

4.2 知識状態に関する主張・想定に抵抗を示す応答あるいは返答

質問という行為は、それがどんな形で行われるのであれ、(1) 質問が要求している知識を自分が持たない (K-) という主張を提示し、また同時に、(2) 質問が要求している知識を相手が持っている (K+) という想定を提示している (Heritage & Raymond, 2012)。以下の事例が示すように、このいずれかに抵抗を示す返答が *ya* で開始されることがある。

まず、*ya* の後続部分が K- の主張 (上記(1)) へ抵抗を示す事例を見よう。事例2 は、幼いころからジャカルタに住む大学生 F と A による会話である。1-2 行目で A が、自分が通学手段として利用する電車が月曜の朝はいつも混雑するという情報提供を行うと、4 行目で F が WH 質問を産出する。

事例2 [FRAN 01:01]

- 01A: Kalo senen pagi ituh, (0.4) kalo dari Lenteng Agung
~なら 月曜 朝 それ ~なら から 駅名
月曜日の朝って、(0.4) レンテン・アグンからだど、

事例1 は、日本語を専攻する大学生 K と R による会話である。この年 (2018 年) にインドネシアで開催されたアジア競技大会のボランティアの選考に応募した K が、すでに選考を通過している R に対し、面接の様子について尋ねている。この抜粋の直前で、R が応募の際、日本語ができる旨を応募フォームに記入したことを明らかにしたため、そのことについて面接で聞かれたかどうかを K が 1 行目で尋ねている。R がその質問に肯定的に答えたことを踏まえ、3 行目で K が WH 質問を産出する。

K の質問は、面接官に日本語能力について聞かれた際に R が「何をした」のかを明らかにすることを要請している。この質問は、例えば「証明書を見せた」のように、端的に答えることも可能である (cf. Fox & Thompson, 2010)。一方で R の応答は、産出開始のタイミングが 1.4 秒のやや長い間合い (4 行目) によって遅延されており、さらに *ya* の産出後も、R は即座に要請されている情報を提示せず、まず面接官の質問が具体的にどのようなものであったのかを、面接の場で生じたやりとりを引用して語ることによって明らかにしている (5-7 行目)。そしてその語りの最後で、ようやく K の質問への答えとなりうる部分を提示している (9-10 行目)。

F は 4 行目の質問を行うことで、A が通学の手段として電車を利用する理由がわからない (K-) という主張を提示している。直後に 0.5 秒の間合いが生じ、応答を産出する上で何らかの間

02 tuh, (0.8) rame banget naik kereta:::::
 PRT 賑やかな ととも 乗る 電車
 (0.8) すごく人がいっぱいなの、電車に乗ると。

03 (0.9)

04F: → >Lah, elu ngapain naek kereta.<
 間投詞 2SG なぜ 乗る 電車
 えっ、お前は何で電車に乗るんだ？

05 (0.5)

06F: ↑Ya:: naek (0.4) grab kek, apa [kek,
 PRT 乗る サービス名 PRT 何 PRT
 Grab に(0.4)乗るとか、何か(に乗る)とか、

07A: ⇒ [Ya ↑kan paling cepet
 PRT PRT 最も 速い
 Ya 電車に乗るのが一番

08 ⇒ naik kerelta:::::
 乗る 電車
 速いじゃん。

09 (0.3)

ってこの応答は、質問した事柄について知識を持たない(K-)という主張に抵抗を示していると考えられる。

一方、次の事例3では、応答者が知識を持っている(K+)という想定に抵抗を示す「応答ではない返答(non-answer response)」

事例3 [STAR 09:26]

01S: =<Udah> itu ju[ga.
 すでに それも
 もうそれ(=PKMP)も(終わった)？

02A: [Belom.
 まだ~ない
 まだです。

03S: → Oh, belom. =Trus kapan.
 間投詞 まだ~ない それから いつ
 あ、まだなのか、それで、いつ？

04A: ⇒ Ya kurang tau sih, [sebenarnya, kapan-nya mah_
 PRT あまり~ない 知る PRT 本当は いつ-the PRT
 Ya よく知らないんですが、実は、いつなのかは、

05S: [hehuhuhuhahaha

4.3 質問の前提を承認しない返答

今回集めたデータの中から、*ya*の後続部分が、質問の前提に抵抗を示していると考えられる事例が下の1ケースのみ見られた。事例4は、某ホテルの従業員Iとその部下Cとの会話である。この抜粋の少し前からIは、最近職場の近くの駅から開通したばかりのLRT(Light Rail Transit)に乗って車内で自撮りなどを楽しみたいと述べ、Cもそれに同行するよう勧誘している。そのやりとりの中で、LRTはクラブ・ガディン駅まで(3駅)しか開通していないことが確認されたが、Iはそれでもかまわないという旨の発言をし、LRTに乗ってクラブ・ガディン駅まで行こうと提案する。LRTについてさらにやりとりがなされた後、Iは再度、Cに同行するよう念押しする。Cはこれを受諾した直後、1行目のWH質問を産出する。

1行目のCの質問に含まれる“lagi”「さらに/他に」という表現は、LRTに乗って行くことのできる場所がクラブ・ガディン駅の他にもあるという前提を体現している。しかし、先行するやりとり(抜粋では省略)でも確認されているように、

題が生じたことが示唆されている(5行目)。これを受けて、Fが電車以外の選択肢に言及すると、Aはようやく4行目の質問に対する応答の産出を開始する(7行目)。冒頭に*ya*が置かれたこの発話は、先の事例1と異なり、先行質問に適合する応答(理由)を端的に提供している。一方でこの発話には、次のような特徴が現れている。まず、冒頭部分に置かれた談話標識*kan*によって、発話の内容がFとの共有知識であること、つまり、質問の答えをFが(質問するまでもなく)既に知っているはずである²ことがマークされている(Wouk, 1998)。また、高いピッチで産出されている(↑以降)ことによって、場違い(inapposite)な先行質問に対する批判的なスタンスを示しているように聞こえる。したが

が*ya*で開始されている。この事例は、ある専攻の新入生Aと先輩Sとの会話である。ここでは、新入生を対象としたリーダーシップ養成プログラム“PKMP”が話題となっている。3行目のSの*trus kapan*。「それで、いつ」という質問は、PKMPが「いつ」実施されるかに関してAが知識を持っている(K+)という想定を提示している。ところがAは、*ya*で返答を開始した後、質問の想定に反して応答に十分な知識を持たないことを表明している(4行目)。

以上の事例が示すように、*ya*によって開始される返答は、先行質問によって提示される、参与者間の知識状態に関する主張・想定に抵抗を示すためにも用いられる。

² Aと同じくジャカルタに住むFにとって、朝や夕方に道路がひどく渋滞することは常識であり、大学から20km以上離れた地域に住むAが、通学手段として電車を選ぶ理由は容易に想像できるはずである。ここでAが応答の内容を自明のこととして扱っているのは、おそらくそのためである。

事例 4

- 01C → Mo yang, ke mana lagi? = °Sebut a[ja.°
～したい 関係詞 へ どこ 他に 言う だけ
あとはどこに行きたいですか? おっしゃってください。
- 02I: ⇒ [↑>Ya< paling jauh
PRT 最も 遠い
Ya 一番遠くて
- 03 ⇒ [ma:ʔna sih?=[↑Dia kan cuman Gading,=
どこ PRT 3SG PRT だけ 駅名
一体どこ? それ (=LRT) はガディンだけじゃないか,
- 04C: [heh heh heh
- 05I: ⇒ =↑Baru sampai Gading kan?=
やっとまで 駅名 PRT
やっとガディンまで(開通した)だけなんでしょう?
- 06C: =°Iya: :°
肯定詞
はい。

くことを示してきた。このとき、ターンの冒頭に置かれた *ya* は、後続部分において何らかの抵抗が示されることへ聞き手の注意を喚起する働きを持っていると考えられる。

この *ya* の働きを他の言語における報告と簡単に比較するならば、*ya* は事例 1 のように端的でない返答の冒頭でしばしば用いられる点で、英語の “well” (Schegloff & Lerner, 2009) や韓国語の “kulenikka” (Kim, 2013) の働きと重なる部分が多いと考えられる。一方で、*ya* は事例 2・4 のように質問の想定などを明示的に問題にするような返答にも現れる点で、先行質問に何らかの「不適切性」が感知されたことを標示する日本語の「いや」(串田・林, 2015) の働きと重なる部分もある。したがって、*ya* は質問に対して「前向き (forward-looking)」(これから産出する返答の問題へ注意喚起する) にも、「後ろ向き (backward-looking)」(すでに産出された質問の問題に反応する) にも働きかけるといえる特徴があると言えそうである。

以上のように本発表では、先行質問の働きかけに沿った応答を産出できないという相互行為上の問題に、インドネシア語において対処する装置の一つを明らかにした。次の課題は、*ya* の産出の仕方 (ピッチの高低や母音の引き伸ばしの有無など) と、そのあとで示される抵抗の種類との関連の有無を明らかにすることである。また、インドネシア語において同様の状況に対処するために、*ya* 以外にどのような資源が用いられるのかについても、さらに検討していく必要がある。

参考文献

- Fox, B. & Thompson, S. A. (2010). Responses to *wh*-questions in English conversation. *Research on Language and Social Interaction*, 43(2), 133-156.
- Hamdani, F & Barnes, S. (2018). Polar questions in Colloquial Indonesian: A pilot study. *Journal of Pragmatics*, 132, 1-20.
- Heritage, J. (1998). *Oh*-prefaced responses to inquiry. *Language in Society*, 27, 291-334.
- Heritage, J. & Raymond, G. (2012). Navigating epistemic landscapes: Acquiescence, agency and resistance in responses to polar questions. In: D. Ruiter, J. Peter (eds.) *Questions: Formal, Functional, and Interactional Perspectives*. Cambridge University Press, pp. 179-192.
- Kim, H. R. S. (2013). Reshaping the response space with *kulenikka* in beginning to respond to questions in Korean conversation. *Journal of Pragmatics*, 57, 303-317.
- 串田秀也・林誠 (2015). WH 質問への抵抗—感動詞「いや」の相互行為上の働き 友定賢治(編) 感動詞の言語学 ひつじ書房 pp. 169-211.
- Raymond, G. (2003). Grammar and social organization: Yes/no type interrogatives and the structure of responding. *American Sociological Review*, 68, 939-967.
- Schegloff, E. A. & Lerner, G. H. (2009). Beginning to respond: *Well*-prefaced responses to *wh*-questions. *Research on Language and Social Interaction*, 42, 92-115.
- Sneddon, J. (2006). *Colloquial Jakartan Indonesian*. Pacific Linguistics.
- Stivers, T. (2011). Morality and question design: ‘Of course’ as contesting a presupposition of askability. In: T. Stivers, L. Mondada & J. Steensig (eds.) *The Morality of Knowledge in Conversation*. Cambridge University Press, pp. 82-106.
- Stivers, T. & Hayashi, M. (2010). Transformative answers: One way to resist a question’s constraints. *Language in Society*, 39(1), 1-25.
- Wouk, F. (1998). Solidarity in Indonesian conversation: The discourse marker *kan*. *Multilingua*, 17, 379-406.
- Wouk, F. (2001). Solidarity in Indonesian conversation: The discourse marker *ya*. *Journal of Pragmatics*, 33(2), 171-191.

³ ただし C は、LRT に乗る他にどこに行きたいかを尋ねる意図でこの質問を産出した可能性もある。しかし I 自身はここで LRT に乗ること自体に強く指向しているため、LRT に乗って他にどこに行きたいかを尋ねるものとしてこの質問を解釈したと思われる。本発表の分析では、応答者である I が先行質問をどう捉えているのかがより重要であると考え、本文ではこのことに触れていない。

⁴ この事例は、質問者が踏まえるべき情報が質問に先立って (事例 2 では常識として、事例 4 では先行するやりとりにおいて) 共有されている点で、一見、事例 2 と似ているように見えるかもしれないが、この事例における応答者の返答は、質問の答え (つまり、I が他にどこに行きたいか) が自明であるというスタンスを示すことで知識状態に関する主張に抵抗しているのではなく、質問と関連するものごとについての質問者の理解 (つまり、LRT で行ける場所が他にもあるという理解) の誤りを指摘しているという点で事例 2 と異なっている。